



青山博之  
会長

東京大学名誉教授

## 巻頭言 日本地震工学会の発足に当たって

日本地震工学会が21世紀の最初の日である2001年1月1日を期して発足いたしました。設立趣意書にありますように、これだけ地震工学の研究も実務も盛んなわが国に地震工学の学会が無かったことが、むしろ不思議であり、不自然であったのでありまして、2000年12月20日の設立総会へむけての有志の皆さんの情熱的な準備活動は、いわば、やっと在るべき姿を実現できるという喜びの反映だったとも申せましょう。いよいよ学会が発足し、千人あまりの会員の皆さんに本格的な活動を始めて頂けるようになりました。皆さんの情熱と、使命感と、そして高い学術、技術が、日本地震工学会という場に結集して、地震工学を発展させていただけるものと信じております。

本格的な活動を始めにあたって、考えておくべきことがいろいろあるように、私は思います。第一に、1月1日を期して日本地震工学会が発足したと言いましても、学会があらゆる準備を万端整えてスタートしたわけではないということです。今まで存在しなかった学会が、出来たとたんに土木学会や建築学会のような既存の大学会なみに活動できるわけがありません。むしろ最初は、ああでもない、こうでもない、試行錯誤しながら活動する事になると思います。脇で見ている人にはまどろっこしい感じかも知れません。しかし、学会が一人前の学会に成長するには、時間が必要なのです。建築学会も、今でこそ会

員3万8千人を擁する大学会ですが、1886年(明治19年)に造家学会という名前で発足したときの創立会員は、わずか26人だったのです。建築学会と同じ規模の土木学会にしても、1914年(大正3年)の創立時の会員数は、380人だったそうでありまして。千人でスタートできる地震工学会は、恵まれていると申せましょう。この学会の成長のために、会員の皆さんにはいっそうのご努力とご協力を頂き、また周辺の皆さんは、温かい目で見守ってやっていただきたいと思います。

つぎに、日本地震工学会でこれからやろうとすることは、恐らくその大部分が、今まで全く無かったことではなく、今まで各学会に分散して行われてきたことを再編成して、より高度に、より能率的にやろうとするものだと思います。その再編成の過程では、当然、ある種の摩擦や、軋轢が生じることが予想されます。このような問題の解決のためには、我々は、いたずらな自己主張ではなく、日本の地震工学の発展のために、ひいては世界の地震工学の発展のために、何をどうすべきかという、大所高所に立った判断を行かなければならないと思います。

具体的に、日本地震工学会が最初に何をすべきか、これはこれから我々がまず議論して行かなければならないことですが、私の個人的な意見としては、まず、従来土木、建築、地盤、あ

るいは機械、地震学、社会科学などに分かれて活動してこられた会員相互の連絡を密にし、理解を深めてゆくことが大切だと思っています。もちろん一般社会へ向けて働きかけて行くことや、海外との情報交流も重要ですが、我々はまず自分の足元を固めて行くことが必要であり、そのためには分野間の連携を強めることが再優先の課題になると考えております。

本学会の発足に当たり、今後展開して行くさまざまな活動に

会員の皆さんの御理解と積極的な御参加を頂きたく、また、皆さんの周りにいらっしゃる、地震に対して何らかの関わりのある多様な分野の方々に、本学会への入会をお勧め頂きたいと思えます。今まで皆さんから頂いた数々のお励ましやお力添えに対し、あらためて御礼申し上げますと共に、今後の一層の御協力をお願い申し上げます。